

現代世界演劇

2



# 代世界演劇

2

の反自然主義(2)

社

John Millington Synge.....RIDERS TO THE SEAS  
シングー海ノ騎りゆく人びと 小田島雄吉

イネイツー湖の井戸 高橋康也  
William Butler Yeats.....AT THE HAWK'S WELL

エ・G・オニールー皇帝ジョーンス 沼沢治治・村田元史  
Eugene Gladstone O'Neill.....THE EMPEROR JONES

F・ウェーテギントー地霊 内垣啓一  
Frank Wedekind.....ERDGEIST

〈赤いメガフォン〉集団創作ーシナから手をひけノソビエト権力のために 千田是也  
{HANDE WEG VON CHINA!  
{FÜR DIE SOWJETMACHT  
(Das Rote Sprachrohr).....

L・ピランテッロー山ノ巨人たち 赤沢 寛

Luigi Pirandello.....I GIGANTI DELLA MONTAGNA  
B・マヤコーフスキーーミステリヤ・ブッフ 佐藤恭子

Владимир В. Маяковский.....МИСТЕРИЯ-БУФФ  
解説 千田是也



現代世界演劇 2 (全17巻別巻1)  
近代の反自然主義 (2)

定價 二二〇〇円

一九七一年五月二五日印刷  
一九七一年五月二五日發行

訳者 ©

小島雄志 高橋康子 沼田治史 村田史一 内田啓一 千田是寛 赤沢恭子 佐藤恭子 寺村五子 田中昭三

発行所 株式会社 白水社

東京都千代田区神田小川町三の二四

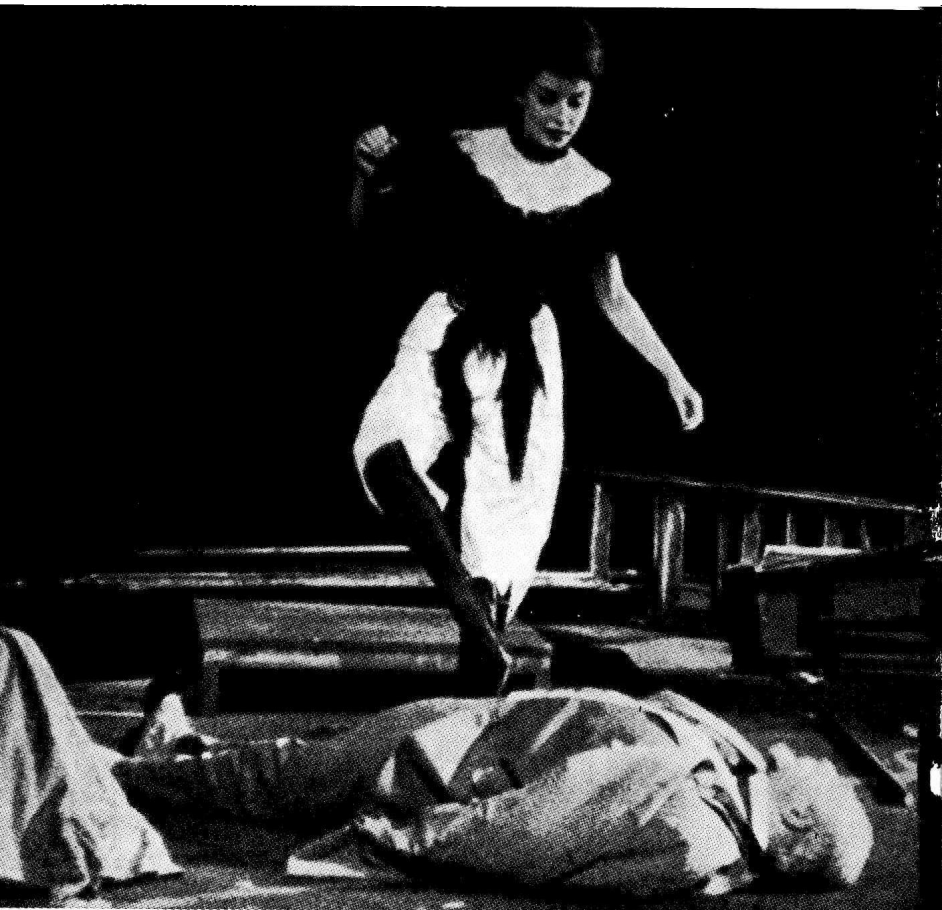
電話東京(割)七八二(代)

振替東京三三三二二八

郵便番号一〇一

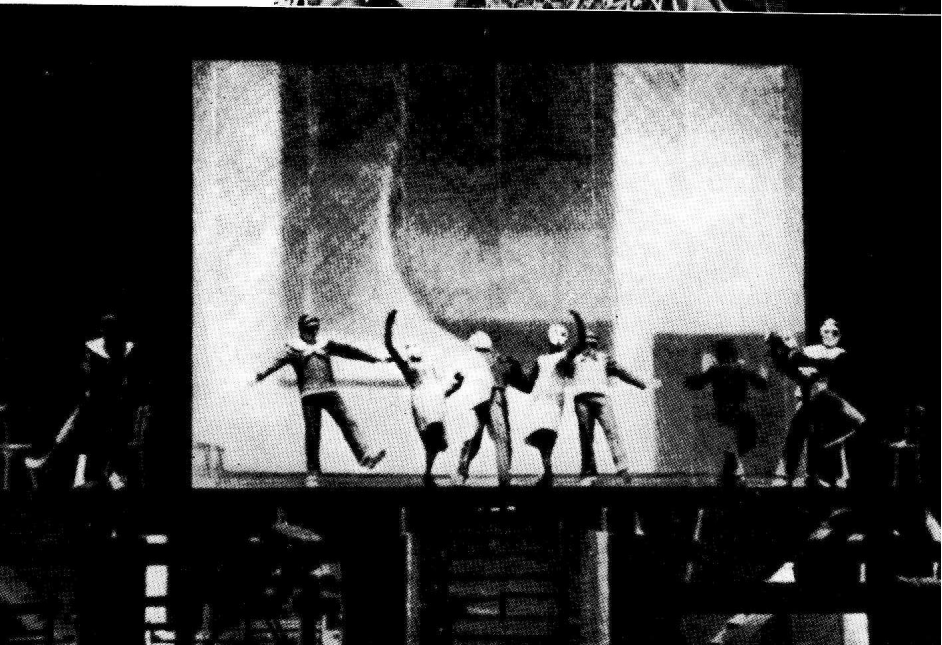
理想社印刷・加瀬製本

(分) 0397 (製) 51520 (出) 6911



ヴェーデキント「地 霊」

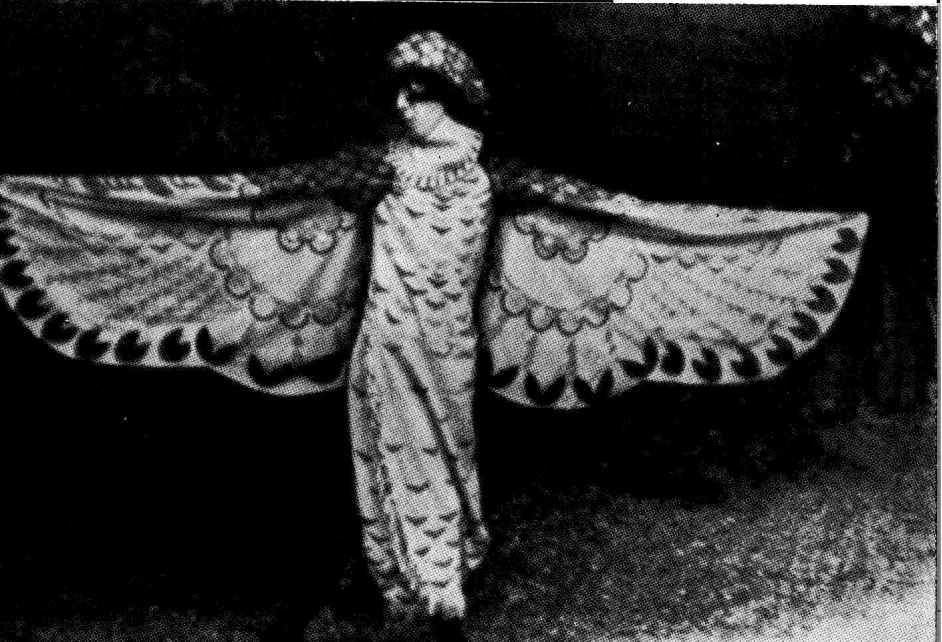
ピランデルロ「山の巨人たち」





シング「海へ騎りゆく人びと」

イエイツ「鷹の井戸」





マヤコーフスキー「ミステリヤ・ブッフ」

オニール「皇帝ジョーンズ」



目次

J・M・シンググ作 小田島雄志訳 海へ騎りゆく人びと……………	7
W・B・イエイツ作 高橋康也訳 鷹の井戸……………	21
E・オニール作 沼沢治治・村田元史共訳 皇帝ジョーンズ……………	37
F・ヴェーデキント作 内垣啓一訳 地 霊……………	73
《赤いメガフォン》集団創作 千田是也訳 シナから手をひけ……………	155
ソビエト権力のために……………	171
L・ピランデルロ作 赤沢 寛訳 山の巨人たち……………	213
B・マヤコーフスキー作 佐藤恭子訳 ミステリヤ・ブッフ……………	275
解題……………	367
解説 千田是也……………	375

装幀  
朝倉  
攝

海へ騎りゆく人びと

ジョン・ミリングトン・シンゲ作  
小田島雄志訳

John Millington Synge  
RIDERS TO THE SEA  
1904



登場人物

モーリヤ 老婆

バートレー その息子

カスリーン その娘

ノーラ その妹娘

男たち、女たち

場所 アイランド西方の離れ島

田舎家の台所。網、雨合羽あまがつば、糸くり車、壁に立てかけた数枚の新しい板など。二十歳ぐらいの娘カスリーンが、パン用の粉をこね終わり、それを暖炉にかけた円型オーヴンに入れる。それから手をぬぐい、糸車で糸をくりはじめ。少女のノーラがドアに顔を出す。

ノーラ (低い声で) 母さんどこ?

カスリーン 横になってんのよ、かわいそうに。眠れるもんなら眠ってるだろうがね。

(ノーラは静かにはいってきて、ショールの下から包みをとりに出す)

(糸車をぐるぐるまわして糸をくりながら) なんね、それ?

ノーラ 若い神父さんがもってきたんよ。ドネゴールの浜に打ち上げられた溺死でせし人の、シャツと靴下なんだって。

(カスリーンはぎくっとして糸車を止め、身をのり出すようにして聞く)

これがマイケル兄さんのもんかどうか見てくって言うんよ、母さんが浜に出たってすきにでも。

カスリーン 兄さんのであるはずないだろう、ノーラ。そんな北のほうまで行きっこないもん。

ノーラ 神父さんが言うには、前にもあそこまで死体が流れてったことがあったんだって。で、《もしこれがマイケルのものだったら、神さまのおかげで手厚く葬ってもらえたと母さんに言いなさい。そうでなかったら、この話はいないほうがいい、母さんが悲しみのあまり死んでしまふといけないから》だって。

ノーラが半開きにしておいたドアが、突風にあおられてバタンと開く。

カスリーン (不安げに外を見やって) おまえ、神父さんに尋ねたかい、バートレーが今日ゴールウエーの馬市まじちに行く人を、引き止めてくれるかどうか？

ノーラ 《わたしは引き止めはしない》って言ってたわ、《だが心配するな、母さんは毎晩おそくまでお祈りをしておいでだ、神さまも母さんから息子をひとり残らずお召しにはなるまい》だって。

カスリーン 白岩あたりの海、荒れてるかい、ノーラ？

ノーラ かなり荒れてんのよ、それが。なんしろ西の方はすぐいなりようだから、潮が風向きの方に変わったら

もっと荒れるかもしれんわ。(包みをもってテーブルに行く) いまあけてみようか、これ？

カスリーン 見ている間に母さんが目を覚ましてはいつきたらどうすんの？ (テーブルに行く) そう簡単にはすまんだろう、あたしたち二人で泣きだしでもしたら。ノーラ (奥に通じるドアに行って耳をすまます) どうやらベッドでござござして居るらしいわ。すぐにここに来るかもしれんわね。

カスリーン すまんけど梯子はしごを出して。屋根裏の泥炭すまみ置き場に隠しとくから。あそこなら母さんも気がつかんだろう。それにまた潮が変わったら、東の方から流れてくるはずのマイケル兄さんを捜しに出かけるだろうし。

二人は煙突の破風に梯子をかける。カスリーンののぼって行って、包みを屋根裏の泥炭置き場に隠す。モリーヤが奥の部屋からはいつてくる。

モリーヤ (カスリーンを見上げながら、文句をつける口調で) 今晚までの泥炭すまみはたんあるだろう？

カスリーン さっきからパン焼いてるんよ。(すまみを投げおろす) 潮が変わってバートレーがコネマラーに行くのなら、きつとほしがると思つて。

ノーラは泥炭すみを拾い、円型オーヴンのまわりに置く。

モーリヤ (暖炉のそばのストールに腰をおろして) 今日  
はあの子も出かけんだろうよ、こんな南西の風がひどい  
日に。出かけようたって、あの若い神父さんが引き止  
めてくださるさ。

ノーラ 引き止めないって言ってたんよ、母さん。それ  
に、エーモン・サイモンだってステイーヴン・フィー  
ティだってカラム・シヨーンだって、みんな兄さんは行  
くだらうって言ってんのよ。

モーリヤ どこにいるんね、あの子？

ノーラ 今週もう一回船が出るかどうかたしかめにいった  
んよ。もう帰ってくるわ、きっと。だって緑岬のところで  
潮が変わって、漁船が東から間切まぎってたもん。

カスリーン 足音がするわ、大岩のあたりに。

ノーラ (外を見て) パートレー兄さんだ、大急ぎで帰っ  
てきたわ。

パートレー (はいってきて、部屋を見まわす。悲しげな  
静かな口調で) コネマールで買った新しい縄、どこだ  
い、姉さん？

カスリーン (梯子をおりながら) とってあげて、ノー  
ラ。白木の板のそばの釘にあるだろう。今朝あたしが掛  
けといたんよ、脚の黒い豚が食べようとしたから。

ノーラ (縄を渡しながら) これ？

モーリヤ そんな繩はそのまま釘に掛けるときよ、パートレー。  
(パートレーは繩を受けとる) マイケルが明日の朝かあ  
さっての朝か、ま、そんなうち浜で見つかってごらんよ、  
そんな繩が入り用になるじゃないか。神さまのおかげで深  
いお墓を掘ってやることになるんだから。

パートレー (繩を整えながら) 雌馬で浜に行くのに手綱  
がいるんだよ。それに急いで行かなきゃならんのだ。今  
日の船をのがすとあと二週間以上出んいうからね。今度  
の馬市は大々的らしいぜ、浜の連中の話だと。

モーリヤ 浜の連中はひどい悪口を言うだろうよ、死体が  
あがったとき棺桶かふを作るもんがいらないとなったら。コネ  
マールでも最高の白木の板を、高い金出して買っついた  
ちゅうに。(白木の板に目をやる)

パートレー 死体があがるわけないよ、これで九日間捜し  
まわって見つからなかったんだし、それにさっきから南  
西の風が吹きまくってるんだ。

モーリヤ ま、見つからんとしても、この風じゃあ海は荒  
れほうだいだし、それにおまえ、ゆうべはお月さんのそ

ばに不吉な星が光ってたんよ。たとえ馬が百匹いようと千匹いようと、息子といやおおまえひとりじゃないか、千匹の馬の値段でだつて息子の命には代えられんよ。

パートレー（手綱を整えながら、カスリーンに） いいかい、姉さん、羊がライ麦畑にはいりこまんように、毎日気いつけてくれよ。それからあの脚の黒い豚だが、仲買人が来ていい値つけたら、売っちゃまっていいからな。

モーリヤ この子のような娘に豚がいい値で売れるもんかね。

パートレー（カスリーンに） 月が沈んで風がないなら、ノーラといっしょに海藻（かき）をもうひと山集めといてくれんかな、ケルプ灰を作るために。これからは男神といやあひとりつきりだ、つらいことになるだろうがね。

モーリヤ そりゃあつらいことになるだろうよ、おまえまで兄さんたちのあと追つて溺れ死んだら。あたしと娘たちだけになったら、どうやって生きてつたらいいんだらうね。このあたしはね、お墓にはいる日ももう目の前の年寄りなんよ。

パートレーは手綱を置き、古ぼけた上着を脱いで、それよりは新しい同じフランネルの上着をきる。

パートレー（ノーラに） 船は波止場に来てるんか？

ノーラ（外を見て） 緑岬をまわつて、いま帆をおろしてゐるわ。

パートレー（財布とタバコをとつて） あと三十分ほどだな。じゃあ二日か三日、風向きが悪くても四日もたちやあ帰つてくるからな。

モーリヤ（暖炉のほうに向きなおり、頭からショールをかぶつて） 強情っぱりだよ、年老いた母親が海に行つてくれるなど頼んでるちゅうに、ぜんぜん耳をかさうとしないんだから。

カスリーン 海へ出ていくのが若い男の人生よ。それに年老いた母親が同じことばかり繰り返すのに、耳をかsettつてむりだわ。

パートレー（手綱をとつて） さあ、急いで行かなくちゃあ。おれ、赤毛の雌馬に乗つて、灰色の子馬を引いてこらうと思うんだ……じゃ、元気でな。（出ていく）

モーリヤ（パートレーがドアを出ようとするとき叫びだす） あの子は行っちゃった。神さま、お助けくださいまし。もう二度とあの子の顔を見ることはないだろう。あの子は行っちゃったんだ。暗い夜が来るころには、あたしは最後の息子を失つてるだろう。

カスリーン 母さん、パートレーがドアのところまでふりむ

いたとき、なんで祝福してあげなかつたんよ？ これ以上悲しみはたくさんだわ、それなのに不吉な言葉であの子を送り出して、いやな思いをさせるなんて。

モーリヤは火箸<sup>ひばし</sup>をとり、ふりむきもせずにやたらに火をかきまわしはじめる。

ノーラ（モーリヤのほうに向いて） あら、パンを焼く泥炭<sup>み</sup>がくずれるわよ。

カスリーン（叫ぶ） あ、しまったことしたわ、ノーラ、パートレーにパンをあげるの、すっかり忘れてた。（暖炉のほうに行く）

ノーラ 暗い夜になるまでに、兄さん、まいっちゃうだろうなあ、お日さんがのぼってからなんも食べてないんだもん。

カスリーン（オーヴンからパンをとり出して） そりゃあまいっちゃうだろうよ、ほんと。だいたい年寄りがくどくどしゃべるような家じゃあ、だれだって分別<sup>ぶんべつ</sup>ちゅうもんをなくしちゃもうよ。

（モーリヤはスツールの上で体を揺すっている）

（パンを切って、布に包みながら、モーリヤに） さ、母さん、井戸のところまで行って、パートレーが通りか

かったらこれを渡すんよ。そうすりゃ、あの子にも会えるし、不吉な言葉も消えちまうだろう。そして、《神さま、お守りくださいまし》と言ってあげたら、あの子も安心して旅立てるわ。

モーリヤ（パンを受けとりながら） あそこであの子に追いつけるかねえ？

カスリーン すぐ追いかけたらまにあうよ。

モーリヤ（よろよると立ち上がり） 歩くだけでも難儀なんよ、あたしは。

カスリーン（心配そうにモーリヤを見ながら） ノーラ、母さんに杖をとってあげてよ。大岩のところですからといかんから。

ノーラ どの杖？

カスリーン マイケル兄さんがコネマラーで買ってきたんがあるだろう。

モーリヤ（ノーラがさし出す杖を受けとって） 世のなかじゃ、年寄りが息子や娘たちにかたみを残していくちゅうに、ここじゃ、若いもんが年寄りにかたみを残していくんだ。

モーリヤはゆっくり出ていく。ノーラは梯子<sup>はしど</sup>のところにいく。

カスリーン お待ちよ、ノーラ、母さんがすぐ引き返して  
くるかもしれないから。かわいそうに、悲しみのあまりな  
んするかわからないんよ、母さんは。

ノーラ 藪くさのところで、曲がった？

カスリーン (外を見て) 曲がっていった。さ、急いで投  
げおろして。母さんがいつ戻ってくるかわかったもん  
じゃないからね。

ノーラ (屋根裏から包みをとって) 若い神父さんは、明  
日こっちに来るって言ってたから、ほんとにマイケル兄  
さんのもんだったら知らせにいかなくちゃ。

カスリーン (包みを受けとって) どうして見つかったん  
だって？

ノーラ (おりにきて) 神父さんの話だと、二人の男が  
夜明け前に密造酒を乗せて舟を漕いでいたら、北の黒い  
崖がけのあたりで、オールの先に死体がひっかかったのだら  
だって。

カスリーン (包みをあげようとして) ナイフをとってお  
くれ、ノーラ。塩水で紐ひもが腐くって、これじゃあ一週間か  
かってもほどこげやしない。

ノーラ (ナイフを渡して) ドネゴールって、遠いところ  
だって聞いたけど。

カスリーン (紐を切りながら) そりゃあ遠いさ。いつ

だったかここに来た男がね——ああ、このナイフを売り  
にきた男だよ——向こう岸から歩いてドネゴールまで七  
日はかかるって言ってたよ。

ノーラ じゃあ流されてたらどれぐらいかかるかな？

カスリーンは包みをあげ、破れたシャツと靴下の片  
方を取り出す。二人は熱心にそれを見る。

カスリーン (低い声で) 弱ったねえ、ノーラ！これが  
ほんとに兄さんのもんかどうかたしかめるなんて、とて  
もできやしないよ。

ノーラ 兄さんがぶらさげといたシャツとってくるわ、両  
方のフランネルを比べてみたらわかるわ、きつと。(隅  
にぶらさがっている衣類を捜す) ないなあ、ここには。  
どこだろう。

カスリーン パートレーが今朝あれを着てたかもしれない  
ね、自分のシャツが塩水でびっしょりだったから。(隅  
を指さして) たしかそこに同じ布地の片袖があったはず  
だ。ちょっと見てよ、それだって役にはたつだろう。

(ノーラはその片袖をもってくる。二人はフランネ  
ルを合わせてみる)